

事業の背景・目的

奈良県版レッドデータブックでは、ヤマトサンショウウオは「絶滅寸前種」に指定されている。事実、県内のあちこちから本種の卵囊は見掛けなくなり、絶滅の可能性がでてきた。本事業では、本種の生息状況を確認するため、卵囊数の経年確認や卵の受精状況、さらに落とし穴を用いた落下確認を目的とした。とくに絶滅と密接に関わる未受精卵の存在にポイントをおき、県内における絶滅に瀕した個体群の状況を明らかにし、加えて本種の卵囊の一部を人工的に孵化・育成する増殖事業もおこなった。そして、それらを踏まえながら専門家らとのシンポジウムを開催し、本種の絶滅が生物多様性に大きな影響を及ぼすことを、参加者と一緒に議論し、共有した。

事業の内容

事業① 生息状況調査

- (1) 奈良県内の分布と生息状況：奈良市内、生駒市内、大淀町内の生息地の産卵状況を調査した。大淀町内では卵囊3対が確認され、その中には合計**374**個の卵があった。そのうちの**171**個は受精卵だった。即ち未受精卵は全体の**54.3%**を占めた。
- (2) 奈良県大和高原での生息状況：大和高原に位置する天理市福住町に生息する本種の卵囊を、本事業では2対確認した。この2対とも未受精卵だった。この結果から、当該生息地は明らかに“典型的絶滅パターン”を辿っていると考えられた。
- (3) トラップ調査：8月、11月、2月の3回とも、トラップには落下しなかった。これは、本種の個体数が少ないからと考えた。

事業② 孵化育成事業

- 2月に天理市福住町の繁殖池で捕獲された雌は、前年に捕獲された雄と繁殖させるため、三重県内の日本サンショウウオセンターで、保護増殖を始めた。



事業③ 普及啓発事業

- (1) シンポジウムを開催：西川完途京都大学教授の基調講演をおこなった。地元の人たちとの協働が始まった。
- (2) 学習会：天理市福住小中学校で、専門家による特別学習会を開催した。
- (3) 「ヤマトサンショウウオの森」づくり：本種が生息する小さな森と隣接する小さな森との間にオープンスペースがある。ここに落葉広葉樹の幼木を植栽し、「森」づくりを始めた。

得られた成果

奈良県内のヤマトサンショウウオの生息状況が危機的状況にあることは、本事業によって明らかになった。それは発見した卵囊中の未受精卵が極端に多かったことがそれを表している。未受精卵が多いのは雄が少ないこと、しかもその雄は高齢個体であったことが考えられた。2022年、天理市福住町で本種の卵囊を初めて発見したが（右写真）未受精卵で、3年続けた調査の結果ではほとんどが未受精卵だった。そこで、実際に小型サンショウウオ用トラップで調査したが、捕獲数はゼロだった。ただ、地元や地域の人たち（ステークホルダー）による本種への危機意識の高まりは予想以上で、保全活動への動きが活発化してきた。このことはヤマトサンショウウオに限らず、奈良県で絶滅寸前種に指定されたカツラギグミを含む希少生物と生物多様性に関する意識の向上が高まっていること示している。このように、次なる保全活動の展開が期待できるようになったことは、本事業の大きな成果である。

